



小説 あらおし悠
挿絵 瀬奈茅冬*

立ち読み版

百合グラドル優衣

禁断ガールズラブ

プロローグ グラビアアイドルの秘めた想い

第一章 初めてなのに……

第二章 先輩グラドルの野外調教

第三章 奪われた清純派アイドルの純潔

第四章 後輩グラドルが開く禁断の門

第五章 優衣の想い、絢の想い

エピローグ 優衣はみんなの百合ペット

登場人物紹介

Characters



まいはら ゆい
舞原優衣

Gカップグラビアアイドル。最近は人気も安定しているものの、もっと自分をアピールしていかないと焦りを感じている。



みなせあや
水無瀬紬

優衣を発掘し、育ててきたマネージャー。厳しい一面を覗かせつつ、彼女を見守る。



はやまゆうき
葉山遊希

先輩グラドル。アイドルを撮影するカメラマンとしても活躍している。



あいり
愛莉

優衣の後輩。先輩である優衣に対する抗意識を燃やす。

昼間の小さな諍いさかいなど忘れ、彼女の裸に見入ってしまう。長身で、均整が取れて、並のグラビアアイドルなんて比べ物にならないくらい美しい。

それに比べて、自分はどうかだろう。

胸はそこそこあると思う。でも背は低いし、腰のくびれも絢より弱く、どこか成長しきれていない子供っぽさが残る。お腹だって、油断するとぽっこり出そうな気がしてダイエツトが欠かせない。肌も、きつと彼女ほどのきめ細やかさはない。

(絢さんがグラビアアイドルになればよかったのに……)

どうせ自分は五位どまりの平凡グラドル。すっかり拗ねた優衣は、身体を隠すかのように、お湯の中で膝を抱えて丸くなった。

「……どうかした？」

羨望せんぼうと嫉妬えんさと怨嗟えんさの渦巻く、邪よしまな視線の気配に気付いたのか、絢が小首を傾げて振り向いた。覗き見がばれた優衣は、動転して呂律が回らなくなる。

「な、何れもないです……」

「ちよつと変よ。やっぱり熱すぎた？」

「だっ……大丈夫！ ちよどいい湯加減ですから！」

覗き見の後ろめたさがそうさせたのか、優衣はお湯を波立てて、逃げるように全速後退した。それでも、狭い浴槽の中では二、三十センチの移動が精一杯。

「……あら、ありがとう」

絢はそれを、優衣が場所を開けたと勘違いしたようだ。最後にボディソープの泡を流すと、長い脚で浴槽を跨いだ。

(うわあっ……！)

その瞬間、優衣は心の中で絶叫した。見てしまったから。彼女の股間に繋る、淡い恥毛を。ほんの一瞬だったけど、他人のそこをこんな間近で目にするなんて生まれて初めて。動揺と混乱の中、慌てて目を逸らすけど、しっとり濡れた黒い光沢の縮れ毛は、すでにしっかりと、網膜に焼きついてしまった。ひと固まりだったそれが、水面で海藻のようにほどけ、彼女の身体が沈んでくる。浴槽からお湯が溢れる音の中、次の衝撃が襲った。

眼前に迫る、絢の膨らみ。たわわに実った女の果实。

(……絢さんのおっぱい！)

綺麗な半球形のそれは、Dカップくらい。薄紅色に色づく小さな蕾が視界いっぱい広がって、あまりの可愛らしさに一瞬、息が詰まる。胸の奥で、心臓が早くて重い鼓動を刻んだ。横目で窺う彼女の胸はすでに大半が沈み、乳首も水面の揺らぎで見えない。でも、柔らかかそうな乳房に沿ってカーブを描くお湯のラインが妙に艶めかしい。

(はあ……おっぱい、いいなあ……)

優衣だつて、それなりに立派なものを持っている。むしろ仕事で日常的にその谷間を見せているくせに、どうして同性の乳房にここまで惹きつけられるのだろう。昼間は男性のおっぱい好きに辟易する場面もあったけど、いつまでも鑑賞していたという気持ちは理

解できなくなる。

「はあ……」

絢が深く息を吐きながら、浴槽の縁に寄り掛かる。小さく波打つお湯と一緒に、彼女の肩が優衣の腕に触れる。かと思ったら、絢はそのまま体重を預けてきた。

「あ、絢さんっ。……どうしたの？」

「どうしたのは、こっちが聞きたいわよ」

「……へ？」

アイドルにあるまじき、間拔けな声で聞き返す。絢は少しだけ唇を尖らせ、優衣の肩に頭を乗せながら腰に腕を回してきた。

「あの……あの!？」

絢の意図が分からず、優衣は思わず腰を浮かせる。しかし彼女は意に介さず、掌を下の方に滑らせた。弾力を確かめるように、柔らかな掌で裸のお尻を撫で回す。

「絢さん、あの………ひっ!？」

彼女の小指がお尻の谷間を撫で上げた。静電気のような痺れが背筋を走り、身体を強張らせる。そんな優衣の戸惑いもよそに、絢はさらに全身をくまなく触り続けた。

「うん、おっぱいもお尻もちゃんと張りを保っているわね。二の腕のたるみもないし。お腹は……油断しちゃダメよ？ 水着姿で一番目立つところなんだから」

何事かと思ったら、どうやら身体検査だったらしい。

「そ、それは分かりましたけど……なにもこんなところで……」

相手や場合によっては、立場を利用したセクハラだ。しかし絢は、ルージユが取れても潤いを含んだように艶っぽい唇を、拗ねたように小さく尖らせた。

「あなたが変なことを言うからよ。……急に売りたいとか何とか」

絢は、ベッドを優衣に譲ってくれた。彼女は床に布団を敷いて寝ることに。マネージャーがタレントを優先するのは当然と言えば当然だけど、ちよつと申し訳ない。なのに。

(……………眠れない)

思い返すと、絢の家に来るのはこれが初めて。それも急なお泊り。

以前、何で仕事で長引くか分からないから、替えの下着と洗顔セットくらいは常備しておくように言われたことがあるけれど、ここでの活用は考えていなかった。それに、さすがにパジャマまでは持っていなかったので、絢に予備を貸してもらった。

(絢さんの匂いにする……)

毛布にくるまると、柑橘系のほのかな香りに鼻孔をくすぐられ、ちよつと胸の奥が跳ねた。これが彼女の匂いなのだろうか。ほとんど毎日一緒にいる人なのに、だからこそ、彼女のプライベート空間へ踏み込むことに、妙な緊張が漲みなぎってくる。

薄闇の中で眼を凝らすと、こちらに背を向け寝息を立てる絢の姿。朝から夜遅くまで働いて、きつと疲れているに違いない。全ては、優衣を売れっ子にするため。

もちろん、自分が「商品」であることは理解している。事務所が優衣を売り出すのも、女の子の夢を叶えましようとか、そんなメルヘンな理由でないことも。

でも絢は違う。違うと思う。優衣は、さつき風呂場で自分を抱き締めながら言ってくれた、彼女の言葉を思い返した。

「優衣、あなた最近変よ？ 急に売りたいなんて言い出して……何を焦っているの？」

さすがは敏腕マネージャー。タレントの変化には敏感だ。優衣が悩んでいるのはお見通しだった様子。でも彼女にとって、それはそんなに「変なこと」なのだろうか。

「順位が上がらないことを気にしているのは分かっているわ。でも、数多いあまたいるグラビアアイドルの中で、売り上げ順位一桁に入れるなんて、むしろ誇っていいのよ？」

「それは……そうかもしれないけど……。でも、あたしはもっと売りたいの！ 一番にやりたいの!!」

本音を隠して激白する優衣に、彼女は少し啞然としたように見えた。

「……変わったわね。あんなにタレント活動に熱がなかったのに……」

それは自分でも驚くほど。絢のためと思っても、目立つことが苦手なのが変わったわけではないのに。

「ねえ、聞かせて優衣。あなたは何がしたい？ あなたは、あなたのしたいことをすればいい。私はそれを全力で支えてあげる。私は、あなたのためなら何でもする」

「だったら……!」

彼女の熱の籠った視線に見詰められ、優衣の胸も熱くなる。でも、それならどうして昼間は、歌手デビューの話を邪魔したのか。聞き返したかったが、そうすると焦りの理由まで彼女に話さなくてはならない。何か言うとまた諫められそうで、口をつぐんでしまう。黙りこくった優衣に、絢は少しだけ悲しそうな顔になった。

結局、風呂場ではそれ以上の会話はなかった。できなかつた。

(絢さんに、恩返しがしたいからなんだよ?)

今は、眠る彼女の背中にそう語りかけるのが精一杯。彼女の優しさに甘え、でもその結果、ほんの少し、二人の心が擦れ違ってしまった気がする。

「……寝よ」

いつかきつと、気持ちを伝えられる日が来る。自分に言い聞かせた優衣は、寝返りを打って、絢に背中を向けた。

どのくらい経っただろう。

次第に眠くなり始め、覚醒と睡眠の境目に、意識が溶け始めた時だった。

「優衣……優衣……」

どこか遠くから、名前を呼ばれている気がする。同時に、身体に違和感を覚えた。胸のあたりがこそばゆい。背中にも柔らかいものが当たって、何かに包まれているように心地いい。

(この感じ、どこかで……)

風呂で胸に抱き締められた、あの温かさ。でもそれを思い出すこともなく、まどろみの中、優衣は自分を抱く手に身体を委ねた。

「はあ……」

まどろみの中で、快楽の息を吐く。

掌が平らなお腹を撫でながら往復し、爪の先で乳房の麓をなぞる。不思議なことに、半分眠っていても、その動きは鮮明に意識できた。触れられたところが熱を孕んで気持ちよく、もつと撫でて欲しいもどかしさに身じろぎする。

(あ……はあ……。きゅ、ふ……ン、ふううう……)

下乳から頂上へ、乳房を逆撫でする怪しい指。蠢く指に身体をまさぐられ、ピリピリ痺れる微電流が全身を駆け巡る。

「ン……きゅあッ!!」

突然、胸の先端に鮮烈な快感を覚え、優衣は自分の声で眼を覚ました。最初に感じたのは、痛みに近い乳首の痺れ。そして自分の姿を確認し、啞然となった。

「え……え？ なにこれ……!!」

部屋の明かりは点いていなかったけど、窓から差し込む月明かりが優衣の姿を照らし出す。パジャマのボタンは全て外され、前が全開。Gカップの胸が晒されている。そして横臥した背中から回された二本の腕。一方はお臍のあたりを撫で、もう一方の掌は胸の膨ら

みを覆いながら、胸を掬い上げるように揉んでいた。

「あうん……ン！ あ、絢さん……ッ!!」

背中は見えなくても、この部屋には彼女しかいない。でも、本当にそうなのかと疑う気持ちも拭いきれない。堅物の絢の仕業とは思えない。

（だ、だって絢さんがこんな……こんなことするはず……や、あうん、あ、あッ!!）

自分でない誰かに胸を触られている。それだけで心臓が破裂しそうだ。驚きと不安で身体が委縮する。

「絢さん……絢さん？ じよ、冗談だよね？ やめ……お願いやめて……や……あ……」
絞り出した声は、か細く震えるばかり。切ない喘ぎにしかなくなってくれない。しかも優衣の懇願を咎めるように、彼女の指先が脇腹を撫で上げた。

「うきゅふああ!!」

爪の先で、まるで筆の穂先が触るか触らないかのような微妙なタッチに、全身の毛穴がぷつぷつ粟立つ。

「な、何これ……あたし……んっ!! ふッ………あッ！」

同時に耳朶を甘噛みされ、身体中からドツと汗が噴き出した。パジャマの背中がしつとり湿る。その不快感に耐えながら、優衣は痺れる指でシーツを掴んだ。

背後の人物の手つきは優しい。でも、全身を襲うこの妖しい感覚を、優衣は知らない。
（な……何、この感じ……やだ、怖いよお……でも……ああ……でも、あああッ!）

怖い。未知の感覚に、肩が、内腿が、爪先が強張る。全身を襲うこそばゆさから逃れたくて、優衣は身体を起こそうとした。しかし背後の人物が、そうはさせまいとして素早く動く。乳首を摘み、急激にクリツと抓る。

「ひああああッ!!」

グラドルにとって大事な胸を乱暴に扱われ、優衣は甲高い悲鳴を上げ、横臥したまま仰け反った。肩甲骨あたりに柔らかいものが当たる。それは紛れもなく女性の胸の柔らかさ。でも、その中心に硬い部分を感じて心臓が跳ね上がる。

(これって……絢さんの……!? で、でも……)

女性の乳首は、こんなにコリコリ硬かっただろうか。今、摘まれている自分のものも、こんなに硬直しているのだろうか。意識したら、急に胸の先が痛いほど張り詰めた。

(え? ど、どうして……何で!!)

時々、硬くなった先端がブラに擦れることはある。でもそれは凍えた時に身体が強張るようなものだと思っていた。こんな状態での硬直は知識にない。無知は新たな混乱を呼び起こし、訳が分からずパニックに陥る。

「……………優衣の、硬くなってる…………」

耳を掠める小さな呟きに、身体がカッと熱くなった。たとえ知識が乏しくても、自分の身体がエッチな行為に反応してしまったことくらい分かる。肉体の変化を指摘され、混乱や困惑を羞恥が一気に上回る。

「いやいやつ、いやあああああ!!」

「優衣、お願い暴れないで！」

それは聞けない。優衣は手足をもばたつかせ、自分を辱める腕から逃れようとした。しかし仰向けになったところで限界。逆に彼女に馬乗りで抑え込まれる。さらに最悪なことに、脱がされかけのパジャマが腕に絡まり、身動きがとれなくなってしまう。

「——！」

ここに至って、優衣はやつと相手の姿を確認した。もちろん、絢であることは分かっていた。でも、いつもの彼女ではなかった。

「はあ……はあ……」

髪を乱し、息を荒らげ、見開いた眼を異様に輝かせている。まるで必死に獲物を捕える獣のよう。優衣と同様、パジャマの前を開いて上半身を晒した姿に、切れ者マネージャーの面影はどこにもない。

「あ、絢さん……？」

怯える優衣に顔を近付ける絢。両腕がパジャマでひとまとめになっているのを幸いに、片手で両の手首を押さえる。その乱暴さとは裏腹に、優衣を見詰める眼は切なげな陰りを帯びていた。

「あなたがいけないのよ。……優衣が悪いんだから……！」

「あ、あたしが……？」

何がだろう。何がそんなに彼女を怒らせたんだろう。

「も、もしかしてお風呂場での話？ でも、それなら……ふぁう!!」

体重を預けるように、絢が覆いかぶさってきた。伸ばした舌で首筋を舐め上げてくる。たっぷりと含ませた唾液を塗りつけるように、ねっとり。

「ふぁぁぁ……あふぁぁぁぁぁぁぁぁ……」

何度も頸動脈を舐め上げられ、時に唇で啄つばまれ、妖しい痺れに背筋が引き攣る。力の抜けた声しか出ない。

「ん……あ……あ……!!」

唇の端から涎が垂れる。けれど身体の上からのし掛かれ、両手を拘束されて拭うことさえできず、顎から首へとだらしなく流れ落ちる。それを見つけた絢が、まるで優衣の代わりにと言わんばかりにペロペロと舐め取った。

「はぁ……優衣の、美味しい……」

「ちよ、あ……絢さん!」

彼女の行動に声が裏返る。でも驚くのはまだ早かった。絢が、啞然とする優衣の頬を両手で挟む。あっと思う間もなく、唇が塞がれていた。

「……………ンッ!」

キスされたのだと気付くまで、数秒かかった。そして、これが優衣にとって初めてのキスであるということを出すのも。



「嫌なことじゃなくて……あたしが、嫌な娘なんです。悪いのはあたし、だから……」
すると遊希は、離れるどころか「ふーん？」と意地悪そうに唇の端を上げ、バスタオルの上から優衣の胸を鷲掴みにした。

「や……あつ!？」

「なら、悪い子にはお仕置きしなくっちゃ」

お仕置き。日常で滅多に使うことのない、でもどこか背徳的な響きの言葉を不意に浴びせられ、優衣の胸が異様に高鳴った。

（そうだ……あたしは悪い子……だから、お仕置きを受けなくちゃいけないんだ……）

もしかしたら、ただエッチをしたいただけの、遊希の口車かもしれない。そして優衣も、罰を受けたというアリバイを得たかっただけかもしれない。でも、たとえこの場限りだとしても、優衣は楽になりたかった。その都合のいい言い訳にすがりたかった。

「お……お仕置き、してください……」

震える声で懇願すると、逸らしていた顔を両手で挟まれ、唇を奪われた。

「いい娘……可愛い……」

遊希の蠱惑的な瞳が理性を狂わせる。再び唇を塞がれ、舌がぬるっと侵入してくる。優衣はそれを、目を閉じて迎え入れた。仔猫がじゃれ合うように、二枚の肉片が睦み合う。

「ん……チュッ」「ふあ、ソむっ……!？」

舌に溜まった唾液を吸引され、後頭部が快感で痺れた。反射的に、彼女の背中にしがみ

つく。遊希の指が耳をくすぐり、もどかしい快感に身悶えせずにいられない。

「うあつ……あうつ、ぷあつ……!!」

もがくように顔を仰け反らせ、唇が離れてしまった。それでもなお、甘い痺れが身体を包む。そんな優衣を見下ろして、遊希がからかうような視線を向ける。

「……キス、そんなに気持ちいいんだ？」

意地悪な声で囁かれ、優衣の頬が燃えるように熱くなった。耳まで真っ赤に染まった顔を無言で逸らす。なぜなら、凶星だったから。女の人の唇は、甘くて、柔らかくて、癖になるほど気持ちいい。異性と違って経験がないのに、優衣はすっかり同性とのキスが大好きになっていた。

(そういえば、絢さんの唇も気持ちよかった……)

急に胸がズキンと痛んだ。どうしてだろう。絢のことを考えると、切なくて息が苦しくなる。遊希のことは好きだ。でも、こうして彼女とエッチなことをしていると、罪悪感で胸が締め付けられる。

「……優衣ちゃん。今、誰のことを考えてる？」

遊希の、静かな声にハッと顔が上がった。優衣を見る彼女の表情はどこか悲しげで、また別の罪の意識を優衣に抱かせる。

「あ、あたしは……」

答えたら、余計に彼女を傷つけてしまう気がしてならない。唇を噛んで言いあぐねる優

衣の頬を、彼女の手がそつと撫でた。

「浮氣した罰よ。……口を開けて……舌を出して」

追及されなかつたことにホッとして、言われた通りに舌を伸ばす。すると彼女は口をすぼませ、水飴のようにねつとりとした唾液を垂らしてきた。ぷつぷつと細かく泡立つ粘液が、舌を樋とくのように伝って喉奥に流れ落ちる。とろりとした感触が気持ちよくて、優衣は思わず喉を鳴らして飲み込んだ。

（なんか、甘い匂い……。美味しい……）

もつと欲しくなつて舌を伸ばすと、遊希が再び唾を垂らした。しかし喘ぎながら飲み込もうとした直前、不意打ちのように舌を挿し込まれた。グチュグチュと派手な音で口腔内を攪拌され、身体がカッと淫靡な熱に包まれる。

「あ、むあ！ んむつ……みゆああああああ!!」

同時に、遊希の手がバスタオルの隙間から忍び込んだ。まだシャワーの火照りを残す乳房を揉み上げる。指の腹で乳首を転がされ、優衣は堪らず心地いい呻きを上げる。

「う……あつ……あうンッ！」

「気持ちいい？ ……こっちはどうかしら」

タオルを払い、完全に露出した胸に遊希が吸いついた。激しく吸引したかと思うと細かく転がし、悶えさせられたところで、今度は舌がねつとり舐め上げる。反対の胸にも五本の指が蠢くように絡みつき、乳輪や乳首を摘んで転がす。どっちも気持ちよく、でも左右

で微妙に違う痺れに襲われて、優衣は我慢できずに身体をくねらせた。

「あんっ、あきゅッ……きゅふッ！ き、気持ちい……みゅああああつ！」

「あらあら。罰を受けているのに気持ちいいなんて、困った娘ね」

「ご……ごめんなさいっ、でも……ひゅふぁッ！」

ちゅぱつと乳首を吸い上げられ、優衣の背筋が強張った。股間も熱くなって、夢中で内腿を擦り合わせる。そこへ、遊希の指が割り込んだ。乳首を舐めながら中指で膣口をくすぐり、優衣を切なく悶えさせる。

(いい……気持ちいい！ あたし……いつからこんなにエッチになっちゃったの……?)

麻痺しそうな意識の中で自分を責める。それでも身体は快感を求めた。罪悪感と自己嫌悪が優衣に脚を開かせ、遊希の指を求めてしまう。

「苛めて……もつと、苛めてください……」

涙目のおねだりに、遊希は嬉しそうに眼を細めた。淫裂を撫でながら身体を起こし、器用に片手でワンピースを脱ぎ捨てる。ブラのホックを外すと、ぷるんと揺れて現れる豊かな乳房。その美しい白さに、口を開いて思わず見惚れる。

「ふふふ……」

そんな優衣に、彼女は妖しい微笑みを浮かべ、艶めかしく腰をくねらせながら、再び身体を重ねてきた。

「あ……あつ!! おっぱいが……おっぱい……いいッ！」

つきたての餅のように柔らかな、二人の豊乳が触れ合い、ふにゆりと潰れた。遊希が円を描くように身体を揺らす。滑らかな肌が擦れ合うのが堪らなく心地いい。優衣も釣られて身体をくねらせると、コリコリと勃起した乳首同士がせめぎ合って、指先まで痺れる快感が全身を駆け巡った。

「はっ……はう、うあっ……これ、すご……イッ、や……ッ！」

悶える優衣の頬を遊希が舐める。その舌は首筋を伝い、鎖骨を辿り、胸の間を何度も往復した。そこに大量の唾液を垂らし、さらに滑りのよくなつた乳房を絡め合う。

「どう？ これ凄いでしょ？」

「こ……こんなっ……む、胸……グチュグチュ、やらしい音……あんっ、やあんっ！」

唾液が混ざる卑猥な粘着音に気がおかしくなりそう。夢中で彼女の背中にしがみつくと、無意識に彼女の太腿を両脚で挟み、股間を擦りつけるかのように腰を振った。

「遊希さんっ、遊希さんッ……い……ひっ……ああああん!!」

「あふん……優衣ちゃんのおっぱい、気持ちいい……。ふふっ」

心行くまで胸を楽しんだ遊希は、身体を滑らせ、脇腹、そして脚の付け根にもたつぷり唾液を塗りつけていく。舌が核心に近付くにつれ、優衣も期待に胸を昂らせた。指で触られるのも気持ちいいけど、舌の柔らかな弾力で責められる、あの心も身体も蕩けるような快感が忘れられない。

「はああ……ああああ……！」

しかし、あと数ミリというところまで接近しながら、彼女の舌はチロチロと周囲をくすぐるだけで、秘裂に触れようとしてくれない。腰を動かし自分から押し付けようとしても、すんでのところで逃げられてしまう。激しい疼きに炙られた身体は、もう限界寸前。

「ど、どうして……。お願い……。お願い舐めて！ あたし……。おかしくなっちゃう!!」

焦らされすぎて、恥ずかしいおねだりを叫ばされる。彼女は鼠径部に吸いつき、それだけでもお尻が跳ねてしまうほど気持ちいい。だけど、膨らみきった中心部への刺激の期待は止められない。

「ンもう……。罰だつて言ってるのに、優衣ちゃんばかり気持ちいいのって、不公平よ」

「はあ……。あ、ああ……。何でもします……。だから……。!」

今日なら、今なら、罰でも何でも受け入れられる。遊希は身体を半回転させ、お尻を向けてきた。淫裂の襞が小さく蠢き、たつぷりと湛えた蜜が今にも滴り落ちそうになる。激しい肉欲に朦朧とした優衣は、彼女のお尻を引き寄せて、甘い匂いで誘う花びらに迷うことなく口づけた。

「あふう……。遊希さん……。んむ、チュツ、じゅぱつ、じゅるっ!」

「はうん! そ……。そうよ優衣ちゃん! あ、あああ……。そう、あつ……。舌で抉るように……。はう! きッ……。気持ち……。いいッ。いっぱい舐めて!!」

気持ちよさそうな遊希の声が嬉しくて、優衣は彼女の恥裂にむしゃぶりついた。同性の性器へキスするという躊躇はもはやなく、襞の蜜を掻き出すように夢中で舌を動かす。

「はああ……遊希さんの……ちゅっ、美味しいれふ……。んむ……ぺろ。れろれろ、ちゅっ……ちゆるるっ。ちゅば、じゆるんっ！」

「あああん！ ゆ、優衣ちゃん凄いッ。し、舌……わたしの、はああ……そこっ、クリちやん吸って……きゅッふあ！ そんなの……そんなの、ダメえええっ！」

舌先に感じた尖りを唇で挟んで震わせると、遊希の腰が暴れ出した。それを必死に捕まえさらに吸う。遊希も悲鳴を上げながら優衣の股間に顔を埋めた。秘裂を思いきり左右に広げ、伸ばした舌で粘膜を舐めまくる。優衣のお尻も暴れて遊希を跳ね飛ばそうとするけれど、彼女は太腿に腕を回してしがみつき、膣口に舌を突き入れていた。

「ひッ……あああッ!? ゆ……遊希ッ……さんッ!!」

待ち望んだ快感に涙を流して悦び、優衣も淫裂とのディープキスを食った。小陰唇の襞を掻き分け、膣前庭の真ん中にある膣口から蜜を吸い取る。

「優衣ちゃん、いいっ！ き、気持ちよすぎて……頭、どうにかなっちゃいそう……!!」
「あああ……あらひも、れふっ。い、いい……気持ちいい……れふっ！」

快感を口にするたび、しかし優衣の胸がズキズキ痛んだ。これは罰。絢を困らせた自分へのお仕置き。そのはずなのに、他の女性の身体でこんな気持ちいい思いをするのが罰であるはずがない。自分の浅ましさに嫌悪感さえ覚える。

(絢さん……ごめんなさい……)

どうして、こんな時にまで絢が気になるのだろう。不意に浮かんだ疑問に愛撫の手が緩



んだ、その刹那、鋭い痛みが淫核を襲った。遊希が菌を立てたのだ。

「キッ……ひッ!!」

「他の誰かのこと考えちゃダメって言ったでしょ」

「ご……ごめんなさいっ。ひッいいいいっ!!」

激痛に大粒の涙が零れる。しかし今度はそこを温かい唾液を含んだ舌で舐められ、瞬時にして痛みが倒錯した快感にすり替わる。それでも絢の幻影は消えはしない。むしろ自分に自分の愚かさを思い知らせようと、優衣は愛撫にのめり込んだ。

遊希の陰唇を甘噛みし、蜜を啜り、小刻みに動かす舌先でクリトリスを責める。彼女も淫核を甘噛みし、優衣に蜜を溢れさせる。

「はぎゅっ、きゅあっ! しよこらめっ……らめらめっ、だめえええッ!」

くぐもった悲鳴が重なって、どちらの声か判別がつかない。延々と続きそうな相互愛撫の均衡を、遊希が破った。粘膜を舐めながら、同時に指先で淫核を振り上げる。

「ひッ……きひいいいいッ!」

強烈すぎる刺激に、遊希は自分のものとは思えない悲鳴で背中を仰げ反らせた。腰が踊る。自分もしなくてはと思うけど、身体が痙攣してコントロールできない。ただ無我夢中で震える指先を遊希の膣に突っ込む。

「あひいいっ! 優衣ちゃんそこ、そこおッ!」

何が何だか分からないまま優衣は指を彼女の膣に出し入れし、膣肉壁を擦りまくる。

「マネージャーをやめて経営に回れっていう話でしょ？ それなら断ったわ。あの社長、私だつてさつき聞いたばかりなのに、先に優衣に話すなんて……！」

「すぐく憤っている。こんなに感情を剥き出しにした絢は初めて見るかもしれない。」

「でも……じゃあ……」

「誰が優衣のそばを離れるもんですか。私は……私は優衣のこと……！」

「はーい、ストロップっ!!」

気分が盛り上がったところで、遊希と愛莉が割り込んだ。抱き合っていた優衣と絢を無情にも引き離す。

「絢さんに、そこから先を言う資格はないわ。あなた、今までどれだけ優衣ちゃんを悲しませてきたと思ってるの？ あなたのせいで優衣ちゃんがどれほど悩んでいたのか、知らないわけじゃないでしょう？」

「そ、それは……」

遊希のお説教に、絢が眼を逸らす。確かに色々と思ひ煩っていたけど、彼女が反論できないなんて、そんな姿を見たことがない。

「遊希さん、そんなに絢さんを責めないで。悩んだのは、あたしの勝手だから……」

慌てて取りなす優衣を、今度は愛莉が押しとどめた。

「先輩は黙っててください！ 絢さんは、先輩から逃げてたんです。愛莉にかかりつきりになつたのも、先輩からの逃避だった。そうなんでしょ!!」

新人にまで叱責され、絢は無言で俯いてしまう。でも、彼女たちが何を言っているのか優衣にはいまひとつ理解できない。重大な何か欠けていて、話が繋がらない。

「あの……ふたりは、どうしてそこまで絢さんを責めるの？」

「……ホント、優衣ちゃんは鈍いわねえ。まあ、そこが可愛いところなんだけどお……。いいわ教えてあげる」

遊希が勿体ぶって笑みを浮かべる。何かを叫ぼうとする絢の口を愛莉が塞ぐ。

「絢さんが、優衣ちゃんを好きなのに、逃げて冷たくするからよ。はっきり告白しないから、優衣ちゃんは絢さんの気持ち分らずに、悶々とする羽目になったんでしょ」

「だって！　だって……マネージャーがタレントを好きになるなんて……。それに私と優衣は女同士なのよ!!　そんなスキャンダル……優衣には似合わない……」

他人に大事な告白を勝手に代行されて、絢がつくりと肩を落とした。告白するつもりなんて、なかったのかもしれない。それが、彼女のマネージャーとしての矜持なら。

「……でも絢さん、あたしのバージン奪ったよね？」

重大で不可解な疑問を、ついそのまま口にした。絢が真っ青になる。遊希と愛莉に殺気が満ちる。

「……愛莉ちゃん、絢さんを縛っちゃいなさい」

「はい、遊希さん」

「え……ちよつ、何するのふたりとも……やめてえええ!!」

グラドルふたりに襲われて、絢が手首をひどくくりにされた。何のために持っていたのか、遊希がバッグから取り出した紐で縛られ、コロンと床に放り出される。

「なにがスキャンダルよ、大事な優衣よお！ 自分の欲求はしっかり満たしておいて！」
「それは……その……」

絢が、かつて見たことがないほど動揺する。冷や汗を流し、しきりに眼を泳がせて。しかし追及から逃れられないと悟った彼女は、諦めたように項垂れた。

「だって、あの時は……怖かった……怖かったの！ 優衣が私の前から消えてしまうような気がして……そう思ったら、どうしようもなくなつて……！」

あの時。優衣が海で溺れた時。命の危機だったせいかわ、優衣も自分の存在がひどく頼りないものと思った。それを、絢も感じ取ったのかもしれない。

「だから、私のものにするには今しかないって思ったの。でも、勝手な思い込みで優衣を傷つけてしまったから、合わせる顔がなくて……」

絢は床に顔を伏せ、恥ずかしそうに背中を丸めた。でも優衣は、そんな彼女の姿に、むしろ胸のつかえが取れる思いだった。

（だから絢さん、あたしと距離を置いたんだ……）

そこまで自分を大事に思っていてくれたなんて。そして、優衣と同じように、相手に嫌われることを怖がっていたなんて。

（なんか絢さん、ちょっと可愛い……）

心の中でクスリと微笑む。しかし、遊希たちはそうはいかないようだった。

「罰よ。そこであなたの大事な優衣ちゃんが、わたしたちに汚されるのを見てなさい」

遊希と愛莉が服を脱ぐ。現場からそのままの格好だったのか、ふたりともその下は撮影用の水着。

「え？ ……え、汚すって…あのっ… ……んむーッ!？」

急激な状況の進行についていけず、戸惑っている優衣の唇を遊希が塞いだ。不意打ちで逃げ腰になるのを、愛莉が背後からの羽交い締めで妨げる。

「ちよ、ちよっと待って愛莉ちゃんっ」

「心配しなくても、ちゃんと鍵は掛けました」

「そ、そういうことじゃなくて…絢さんの前でなんて…あふ、ンッ…むーっ!!」

前後を挟まれ身動き取れない。遊希が、膝の間に腰を押し込んでくる。口腔の奥深くまで、舌を挿し込んでくる。その手がプチプチとブラウスのボタンを外し始めた。前が開くとすかさず愛莉がブラを外し、その間に遊希はスカートに手をかける。

「あぶ… ……いやん、あ… ……ああ… ……!!」

抵抗しようにも、唾液を掻き回すほどの濃厚キスで身体はふにゃふにゃ。いつ意気投合したのかと思うほど見事なふたりの連携で、優衣は瞬く間に全裸に剥かれてしまった。

「ふはあ… ……あは、優衣ちゃんとのキスって、気持ちいい… ……」

「あ… ……はあ… ……ん、ふ… ……は… ……。お願いやめて… ……。絢さんが… ……あああ… ……」

キスに酔いながらも、絢の視線は感じていた。視界の端で、遊希たちに弄ばれて悶える優衣に呆然としている。遊希も愛莉も好きだけど、絢の気持ちを考えると、心が張り裂けそうに痛い。苦悩の表情を浮かべる優衣に、遊希が内緒話のように囁いてきた。

「……これは、優衣ちゃんを苦しませた彼女へのペナルティよ。……でも心配しないで。絢さんを傷つけるようなこと、するつもりなんてないから……」

「……………ほ、本当？」

絢をどうするつもりなのだろう。しかし遊希は何も答えず、再び唇を寄せてきた。単に優衣とエッチしたいだけじゃないかと疑いが頭をもたげるけれど、そんなものは、唇粘膜が触れ合う気持ちよさの前に、たちまち溶けてなくなってしまう。

「ゆ、うき……さん……あふ、ちゅぱっ……あむううう……」

優衣と遊希の唇の間に、ねっとりとした唾液の吊り橋が架かった。彼女の眼が淫靡に濡れて妖しく輝く。しかし優衣もまた、自分の瞳が欲情に染まるのを感じていた。キスの感触を反芻するように、遊希のもので濡れた舌で唇をなぞる。

「いいなあ。遊希さん、愛莉も先輩とキスしたーい」

「いいわよ。交代♪」

本人の意思を確認することなく、長身と小柄なふたりが場所を入れ替えた。その間、優衣はぐったりして彼女たちに身を任せてしまう。

「あふん……ん……」

背後から胸を揉まれ、喘ぎを漏らす。わずかに開いた唇を、愛莉の舌尖がくすぐるように舐め回す。どちらも優しいタッチなのに、下唇が痙攣するように震えて止まらない。

(き……気持ちいい……。なんで？ どうしてこんな、に………)

愛莉の焦らしに耐えきれなくなつて、優衣は自分から物欲しげに舌を伸ばした。ほんの数センチ先で、愛らしい釣り目が意地悪そうに細くなる。

「あ……あう、ン……あふうっ……!!」

ぐりんと螺旋を描きながら、愛莉の舌が絡みついた。小さく可愛い濡れ肉片に敏感な味蕾を刺激され、快感の静電気で全身が総毛立つ。年下の少女のキスは激しく、甘く、優衣は我を忘れて彼女の唇に吸いついた。

「んふ、先輩……可愛い……ンッ、ちゅっ。じゆる、ずりゅっ!」

「あふ、ふあ……あ、愛莉ちゃ……ん、きゅふあ、ちゆる……ちゅばッ」

優衣の口の中で、三人分の唾液が攪拌される。唇の端から流れたそれが、剥き出しの胸に落ちた。深い谷間に流れ込み、遊希の手によって今度は乳房の間でグチュグチュと掻き混ぜられる。粘ついた卑猥な音が、頭と心を掻き乱す。

「ほら、聞いて優衣ちゃん……いやらしい音お……。絢さんが見てるのに、エッチ♪」

「い、言わないで遊希さん……。へ……変な音、立てないでえ……!!」

弱々しい抵抗など、優衣を齧つて楽しんでる彼女たちの前では無意味。しかし、さつき彼に触られた時にはあんなにあつた嫌悪感が、今は少しも感じない。苛められているの

は同じようなものなのに。恥ずかしくて堪らないけど、嫌じゃない。

どうして、なんて疑問は瞬時に吹き飛んだ。優衣の舌をしゃぶっていた愛莉が、裸の股間を撫で上げたのだ。

「ひッ……あっ！」

「ああ、先輩のここ、ぐっちょよぐちょ。キスでこんなに濡れるなんて……」

「あ……あ……愛莉、ちゃんッ！ ゆ、指……掻き回さないで……開かないでッ!!」

愛莉が、濡れてふやけた優衣の大陰唇をぱっくり開いた。襷に溜まっていた淫蜜がどろりとお尻の方まで垂れ落ちる。彼女はそれを掬い取り、膣口周りを撫で回す。

「ひっ、あッ！ ひぎゅあッ！」

ズンと、指が膣に突き刺さった。その衝撃の大きさに、涎を飛ばしながら背中を仰け反らせる。膣内の愛液を掻き出すような抽送に、膣肉がひくつき、強張ったお尻が卑猥に円を描きながら浮いてしまう。

「優衣先輩の膣……あつたかい……。あん、もう……。愛莉におちんちんがあつたら、思いつきり犯してあげるのに」

そんな馬鹿なと思いつながら、この小柄な少女に陵辱される自分の姿が頭に浮かび、異様な興奮で身体が悦びに打ち震えた。彼女の指を咥え込んだ腰が、扱くように勝手に動く。

「やらしい腰つき。優衣先輩のやらしいところ、いっっぱい絢さんに見てもらおうね……」
「そんな……ダメ、あっ……」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※主人公の活躍は、美満の方に入ってます。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
公式サイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!